

現役レスラーへのこだわり



(S60) 関口 勉

私は、高校を卒業してからレスリングを始めた。数あるスポーツの中で何故格闘技を選んだか？その回答は単純に「強くなりたい」からだった。各種格闘技の中で何故レスリングだったのか？それは、「自分自身の努力が一番反映できそう」、「一番強い格闘技」と思えたからだった。そしてなにより「相手を痛めつけない」「相手にダメージを与えることなく組み伏せる」格闘技であると見たからである。それらは我ながらの直感だったがそれぞれが的を得ており、40半ばにして現役を標榜する今なお更にその感を強めているところである。

私はそもそもスポーツに関して器用な方ではない、いわゆる運動音痴の部類に属するかもしれない。そのくせ負けず嫌いで目立ちたがり屋という性格から小さい頃大層悔しい思いをしてきたように思う。小中高となんらかの体育会系のクラブ、運動部に属するもレギュラーにすらなれず、自分のガッツやファイトをプレーとして発揮する機会に恵まれなかった。たとえ稀にチャンスが巡っても団体競技の中では納得できる形で情熱を消化することは出来なかった。また小さい子供とは今も昔も変わらないと思うが私のような我が強いくせに不器用な者には冷ややかで、当然のようにささやかではあるが無邪気ないじめの対象にもなったものだ。

そんな幼児期のせい、また、世間知らずの青い正義感も手伝ってか、理不尽な圧力や暴力に対し自ら防衛、対抗できなければならないという思いが芽生え、短絡的に

社会の中で「強くなりたい」、「強い大人になりたい」という意志が固まってきたのだった。

空手、ボクシング、相撲、柔道…、さまざまな格闘技に興味を覚え始めた。格闘技なら自分の勝ちたいという気持ちをダイレクトに相手にぶつける事が出来る、自分の努力を相手に試す事が出来る、たとえ敗れたとしてもそれは目の前の相手に自分が負けたのであって言い逃れもできず、そこには理屈や能書きも無いと感じたからである。

空手やボクシングの「攻め」とは積極的に相手にダメージを与えることである、柔道や相撲は倒れたら勝負が終わってしまう…。それに対して、人間の身体の機能をフルに駆使して戦い、グラウンドになってからの攻防もある、相手に危害を加えることなく技やパワーで相手をコントロールするという点で自分にとっての「強い」というイメージにぴったりで、自分の努力がより反映できるのではと映ったのがレスリングだった。

高校を卒業し満を持したかのように大学の体育会の門を叩き初心者としてレスリングを始めたのだった。当時の私のレスリングにたいするその見方は間違いではなく、自分にとって正しい選択であったと今なお強く思っている。パワーが不足すればトレーニングを積みばよい、スタミナが足りなければ走ればよい、技の切れを良くし幅を広げるには柔軟性を養いスパリングをする、そして後は自分に負けない気持ちがあればよく、全てにおいて相手に勝れば勝ち、相手が自分より勝っていれば負けのだけ、

負けたくなければ相手より頑張ればよいのだ。

私が学生の頃から今に至る戦績、技量あるいは練習量も一流どころの選手の皆さんには遠く及ぶものではない。しかし恥じるものでもなく、私にとっての誇れるものである。もっとしなければならなかったことやすべきことが有った事も十分に理解もしている。しかしその時々において精一杯してきたつもりだし真摯に打ち込んだ、これからその姿勢に変わりはない。一流ではなくても、世界を獲るようなポジションには遠く及ばなくても「現役」で「強く」いたいと願って、今できる限りにおいて打ち込んでおり、その結果や過程には胸をはれるつもりである。

「現役」であればその年代年代に応じた成長や強さを持ち続ける事が出来る。人間老齢には勝てない。どれだけ抗っても衰退していくものだ。しかし、現役続けている間は衰退の下降曲線を緩やかにし、相対的に

強く、若くなっていくことができると考える。つまり若かりし頃よりより強くなれるチャンスが広がると言えるのだ。

現役であり続け、40歳代なりの強さ、50歳代なりの強さを求め、60歳、70歳…、とその年代年代でその年代の中で強くなるチャンスは広がるのだ。相手を傷つけることなく、自分の精進により自分の持ちえた今の身体能力をフルに活動させて相手と戦う格闘技であるレスリングはこれからも私に現役を続け、強さへの憧れを持たせ続けてくれると信じている。

この関口さんのエッセイは、全日本マスターズ・レスリング連盟公式ホームページの「生涯レスリング・オピニオン」のコーナーに掲載されているものを、許可を得て転載させていただいています。

<http://masters-wrestling.jp/opinion.htm>

(編集部)